

について君は資料をもっていないだろうか？

君の F・E

注意。僕は一八六四年の『トリビュヌ』の論説を直接には引き合いに出さないようにしよう。つまり、それではそれにあまり敬意を表するといふものだ。^{三〇}

(1) ロシア皇帝アレクサンドル二世。

(2) 本巻、一六九〔原〕ページを見よ。

八三 マルクスからエンゲルス（在

マンチェスター）へ

〔ロンドン〕一八六六年二月一〇日

親愛なフリッツ

今度は命にかかわるものだった。僕の家族は、それがどんなに重大だったかは、知らなかった。もしこいつがもう三度か四度も同じ形で繰り返されるなら、僕は死神にとりつかれた男だ。僕は驚くほどやせて、まだいまましく弱っている、頭がではなく、足腰なのだが。医者たちが、こ

の再発の主要な原因は過度の夜業だ、と言うのは、まったくそのとおりだ。だが、僕にこのような不節制を強いている諸原因を僕はこの先生たちに知らせることはできない——それを知らせることはまったく無益でもあるだろう。目下のところではまだ身体のあちこちに小さなものができていて痛い、もうけっして危険はない。

僕にとっていちばんいやだったのは、肝臓病がなおって一月一日以来すばらしく捗っていた僕の仕事^一が中断されることだった。「腰掛けること」はもちろん問題外だった。それは今でもまだ窮屈だ。だが、横になりながらも、昼のうちの短い合い間だけだったとはいえ、苦役を続けてきた。本来の理論的な部分では先に進むことはできなかった。そうするには頭脳が衰えすぎていたのだ。そのため「労働日」にかんする篇を歴史的に拡大したのだが、これは僕の最初のプランにはなかったことだ。今度僕が「挿入したもの」は、君の本への一八六五年までの補足（スケッチ的）になっており（そのことは注^三のなかでも言っている）、また将来のことについての君の判断と現実との相違の十分な弁明にもなっている。だから、僕の本が出さえすれば、君の本の第二版が必要にもなるし同時に出版しやすくもなるのだ。理論的に必要なことは僕が書こう。その後の歴史的な補遺は、君が君の本の付録として書くべきものだが、こ

(175)

れについては、『工場監督官報告書』と『児童労働調査委員報告書』と『公衆衛生報告書』とのほかはどの資料もまったくの屑もので科学的には使いものにならない。この資料を使いこなすことは、ヨウに侵されていない君の労働力をもってすれば、三か月でらくに完了するものだ。

ロシア人については、僕はなにも資料を持っていない。

僕の容態が許せば、そのためにすぐに博物館へ行き、またポーランド人のところできがしてみよう。『ワークマンズ・アドヴォケート』にはたいへんな危機があった。これはあす『コモンウェルス』として発行されるが、この転換はブルジョア分子によって行なわれたもので、僕が評議会に欠席していたせいだ。それでも、僕は、病床から文書で脅かして、ある『ノンコンフォーミスト』の連中に代わってエカリウスが編集者になって、毎週会合する編集監督委員会が任命された、という程度には、陰謀を食いとめた。この委員会は、僕、フォックス、ハウエル、ウェストン、マイル（『ノンコンフォーミスト』の発行者兼編集者で今はわれわれの発行者）で構成されている。「プロテスタント」一人にたいして無神論者四人だ。君の論説は今哀れなエカリウス（というのには陰謀が大仕掛けだのに僕は助けてやることができなからで、僕の執筆時間は完全に僕の著作に必要なのだ）にとって切実に必要だ。

君のぶどう酒はいま僕に奇蹟を行なっている。病気の最中には僕は下等なポートワインを買わなければならなかった。というのは、急性のヨウの状態にはこのワインが唯一の適当なものだからだ。

ところで、ジョン・ウォッツは、最近の『工場監督官報告書』で見ると、「機械について」のパンフレットを公表している。そいつを僕に送ってくれるように僕の名で彼に頼んでくれたまえ。

ヴィルヘルムには彼の弱体ぶりについて少しばかり喧しい手紙を書いてやるつもりだ。われわれが望んでいるのは、まさに『ゾツィアール・デモクラート』とラサールの糞全部の没落なのだ。

リヨン（同地の労働者たち）がインタナショナルの評議会に八ポンド送ってきた。

失敬

君の モール

(1) 『資本論』。

(2) 『イギリスにおける労働者階級の状態』（本全集、第二巻）。

(3) 本全集、第二三巻、二五四〔原〕ページ、脚注四八を見よ。

(4) 大英博物館の図書館。

(5) 『労働者階級はポーランドについてなにをすべきか？』（本全集、第一六巻）。

(6) 『資本論』。